

椿の散るとき

伊藤桂一

新潮社版

椿の散るとき

四八〇円

昭和四十五年三月十五日 発行
昭和四十五年十月二十日 二刷

著者 伊藤 桂 一

発行者 佐藤 亮 一

発行所

株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)三〇二二二
〒一六二 振替東京八〇八

印刷所
製本所

二光印刷株式会社
新宿 加藤製本所

乱丁、落丁本はお取替え致しません。

長編「椿の散るとき」・目次

奴^{やつこ}
胤^{だご}

紙
の
船

椿
の
散
る
と
き

白
い
蟬^{せみ}

セ

元

突

欠

一本の藁わら

二七

炎の影

二五

一刻の夢

一八

月あかりの櫛

三三

挿装
絵幀

佐
多
芳
郎

椿の散るとき

奴やつこ
胤だご

一

料亭「たちばな」というのは、日本橋橋町の河岸かし近くにあつて、花江は十三、四のころ、父に連れられて一度行ったことがある。両国へ見世物をみに行つた帰りで、利根鯉の鯉こくや生作りなまのうまい店ときいていた。そのころ花江は、ひと月ほど病氣をしていたあとで、父は榮養をとらせるために、その店へ連れて行つてくれたのかもしれない。

その店の、そのとき食べた魚の味が、どのようなものだったか、いまの花江には記憶はない。しかし、店の場所だけはよく覚えてゐる。あれからもう、五、六年になるのだが。「たちばな」へ着いたときは、暮れきつていた。

玄關先で、応対に出た女中に、呼ばれた相手の近江屋の名を出すと、女中は丁寧に頭を下げてからそのまま引つ込み、すぐに、この家のおかみが出てきた。柳橋の芸者あがりあがりで、紀世——と

いう名も、花江は近江屋から教えられている。

紀世は、四十を過ぎたばかりぐらいで、小肥りの、気のおけない、どこか愛嬌のある顔つきをしていた。芸者だった、というふうにはまるでみえない。町家の女主人のように、なりきってみえる。

紀世は、花江が、

「私、角屋かどやから参りました——」

と、かしこまってとにかく挨拶をするのへ、明るく押しかぶせるようにして、

「ええ、ええ、わかっています。お待ちかねですから、さあどうぞ」

と、いくらかすくみ勝ちになっている、花江の手をとって式台へあがらせる。いいふくめられていたし、手をとってまでくれるのは、どういうことだろうか。二階座敷へ、磨かれた階段をのぼりながら、そのときはじめて花江は、ふっとめまいの来るような、頭の芯にかなしみの掠かすめるのをおぼえた。

十九歳の娘である花江が、この店の敷居をまたぐことは、たぶん生涯に二度とはない、おそろしい運命がひらかれて行くに違いないことを意味している。それについての覚悟は、いく日も前からきめているつもりだったし、いまこの店へ来るみちみちも、重い足どりを引きずる、ということとはなかった。千鳥橋のたもとで、あることで、一度だけおびえたが、それもそのままに過ぎ

てきた。しかし、おかみに連れられて二階座敷へ向うわずかな時間の中で、花江はさすがに、波立ってくることを抑えかねたのである。おかみが手をとってくれているのは、おそらくその動揺を、読みとつてもいるからだろう。

近江屋喜助は、座敷の片隅で、芸者とさしむかって、芸者が畳紙で折紙を折っているのを見ていた。おかみが花江を連れて座敷へ入ってくると、眼をあげてうなずきながら、「来たか。さあさあ、すわんなさい。今夜はあんたは、この客だよ。こうして料理も揃えてある」といった。

膳は、鉤形かぎがたに二つ置かれていて、花江は無理に、空いていた席へ坐らされる。おかみは、折紙をいじっていた芸者に、「わかちゃん。あんたはしばらくいいから、下へ行ってもらおうか。お銚子だけ、たのむわ」といった。

それでわかっただが、女は芸者ではなくて、この店の女中である。ひどく派手ななりをしているので、花江は見まぢがえたのだ。

わか——と呼ばれた女中は、男ならだれでも思わず支えてやりたくなるのではないか、といった脆さもろさをかんじさせる女だったが、座を起つとき、ちらと花江をみて眼で会釈している。

「うちの女中さんはね、上と中と下に分けていて、みなで十人余りいます。あんたが来てくれる

と、上がひとりふえるんです。上——といったって、あんたは特別のひとだけだ。——そういうことになるでしょ、近江屋さん」

紀世は、あとの 喜助に向けて話しかけながら銚子をとりあげたが、喜助は、いまわかが折っていた折紙の まざまなもの、鶴や風船や屋形船や傘の化物や鴉からすや、などを、

「あの子は器用じゃないか。こんなことをどこで覚えたんだろう」

といいながら、そのひとつずつを、行列させるように花江の膳の前に置いて、

「花江さん。あんたにみな上げよう。こういうものは、妙に、氣持を慰めてくれるものだよ」といった。

それからゆっくり、考え込むようなふりで盃に酒を受けたが、それは飲まずに下に置いて、

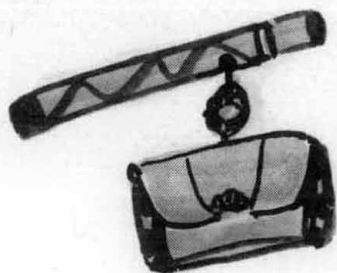
「実は迎えを出そうかと思っていたのだよ。だんだん暮れて来たし。——途中、ひとりで、心細くはなかったかね？」

ときいた。どこか、花江の機嫌をとっている口調である。喜助が、そういう氣の遣い方をしてくれることに、花江はふっと涙ぐむものを覚える。

「別に、心細くはありませんでした。出がけに人が来たのと、それに、橋のところ、ちょっと、こわいことがあったものですから」

花江がそういったのは、あまり、シンと黙り込んでしまっても、と、氣を遣ったからである。

池波正太郎・梅安を語る



「こわいこと、というと、だれか、わるさでもしかけたのかね？」

「いえ。そんなことじゃありません。橋のところで、妙なものを見たんです。暗いので、それを幽霊とみまちがえたんです」

「幽霊と？ だれの幽霊だね？」

「父の——です」

花江はうつむいて、それきり口をつぐんだが、いけない、よけいしめっぽくしてしまつて——と気付いたからだろう。

「おやさんの幽霊か。なにか、そんなものが出たのか？」

「いえ、出たわけじゃないんです。みまちがえただけなんですから」

河岸沿いに来て、渡りかけた橋のたもとで、柳の枯れ枝をふいとみあげたとき、別に風があるとも思えなかったのに、暗い人影が、枝の一方から、ゆらっ——と、吊り下がったのだ。花江がそれをみた刹那せつなに、である。花江は、一瞬はおびえ、息を呑んだが、それだけで歩み出している。それは、ふたつ絡みあっていた奴やつが、枝に掛っていたのがずり落ちかけたもので、それが花江には人の形にみえたのである。花江がそのことを話すと、

「奴やつか」

と、喜助はいい、

「奴やつでよかったわ。ほんとの幽霊だったら、ねえ」

と、紀世も、ともかくそれを、暗い話題でなくするように、ほっとした口ぶりという。

けれどもその奴胤は、そのとき、射るように、暗い衝撃を、花江に与えたことはたしかである。しばらく前の夜更け、花江は、それと似た光景を眼にしている。それは、生者でもなく、また幽霊でもなく、その中間の、きわめて気味の悪いものだった。

夜更けに、寝ていると、ひどく寒かったので、手燭をともして厠かわやに立つことになった。岩井町の「菊屋」という質屋の離室はなれを借りて住んでいたのだが、厠は、渡り廊下を伝って、母屋の方向へ行かなければならない。月あかりで、手燭は要らないほどだったが、厠の中が暗いので持つて行き、それからまた帰ってくると、庭先の松の枝に黒いものが吊り下がっている。それはひどく長いもので（花江にはそうみえた。少なくともそれが、縊死いしした人の姿であるとは、すぐには気がつかなかった）なんだろう？——と、ちょっとの間みていて、そのあとふいに、悪寒が身うちを貫いたのである。

自分ではそのとき、喘ぐように、

「あ、あ、あ、あ」

と、かすれた声をあげていたとしか覚ええないが（あとできいてみると、すさまじく絶叫していたという）——母屋の方に灯がつき、人影が出てくるのがみえた。

それからの、引っくり返るような騒ぎは、死ぬまで生々しく、花江の胸を離れることはないだろう。松の枝に吊り下がっていた父の姿——それと、奴胤の吊り下がっていたのが、一瞬だけ

だが、花江には、折り重なり、ひとつになつてみえたのである。

花江の父、角屋吉兵衛が縊死したことは、喜助はもちろん、紀世もよく知っているはずである。死ななければならなかった事情についても。父の縊死——によって、角屋は、周辺に迷惑をかけたその罪を、ともかく数等は減じられたというべきだろう。残りの罪は、いま、こうして、花江が償おうとしている。償うことについての、具体的な話し合いが、この席でもたれるわけである。

二

弘化二年十月。神田小泉町、真綿問屋井隅屋惣次郎方から出火して、隣接した男服太[■]角屋吉兵衛方をも焼亡した火災は、幸い風が弱かったのと、角屋の東側が建直しの丸めの空地になっていたのとで、他に類焼することもなく、わずか二軒の家が焼けただけでおさまった。しかし、この二軒は、いずれも燃えやすい品物ばかりを扱っていたし、火の廻りも早く、商品、家財のほとんどをも焼きつくしてしまっている。

火元である井隅屋のことはともかくとして、角屋はこの不慮[■]火災で、最後のとどめを刺されたというべきである。諸方に借財を重ねていた上に、さらに借財を重ねて、上方から陸送してきた荷を運び込んだ日の、その晩の火災である。元も子もなく[■]、残ったのは焼跡の地所だけとなったが、むろんこれも、二重三重の抵当に入っていた。